

平成 21 年 6 月 23 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18390589
 研究課題名（和文） 乳がん患者を支える夫のサポート機能を促進させる看護プログラムの開発と評価
 研究課題名（英文） Development and Evaluation of Nursing Program that Promotes Support Function of the Breast Cancer Patient's Husband
 研究代表者
 田中 京子（TANAKA KYOKO）
 大阪府立大学・看護学部・教授
 研究者番号：90207085

研究成果の概要：乳がん患者の夫が体験するストレスと患者へのサポート内容の調査および文献を基に、3 回構成の看護プログラムを作成した。プログラムの評価は、日本語版 POMS、JMS-SSS、日本語版 HAD、サポート提供に関する質問紙を用いた。その結果、開催期間や季節の関係で実行性に課題がみられ、1 回に集約したプログラムに修正した。プログラム実施後はサポート得点に増加傾向がみられたが明らかな差ではなく、今後の継続的評価が課題と考えられた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2006 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2007 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2008 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
年度			
総 計	8,900,000	2,670,000	11,570,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：乳がん患者、夫、サポート、看護プログラム、がん看護

1. 研究開始当初の背景

乳がん患者は、女性を象徴する臓器である乳房が治療対象となることから、がん罹患による生命への脅威のみならず、ボディイメージの変容をはじめとした女性性にかかわるさまざまな苦痛・苦悩を抱えている。そのため乳がん患者にとって夫のサポートは非常に重要な意味を持つ。

乳がん患者を対象とした調査では、夫からの情緒的サポート・手段的サポートの提供は他のサポートメンバーに比べて最も多い一方で、夫からのサポートは患者の精神的健康

の維持・向上にあまり活用されていないこと、および患者へのネガティブサポート提供者は主に夫であるということが明らかになっている（渡辺, 2002）。一方、乳がん患者の夫は患者に多くのサポートを提供しているにもかかわらず、自らが他からのサポートを受けることが少なく、心身に大きなストレスを受けサポートを必要としている存在であるともいわれている（安森他, 1996）。

これらのことから、夫が乳がん患者を適切にサポートできるようにするには、夫自身のストレスを早期に緩和するとともに、患者を

支援する具体的方法について指導していくことが求められる。

2. 研究の目的

本研究では、夫が乳がん患者を支えることを可能にする看護プログラムを開発することを目的として、以下の具体的目標を設定した。

(1) 乳がん患者の夫が患者を支える際に体験している身体・心理・社会的ストレスおよび乳がん患者の夫が患者に提供している情緒的・实际的サポートの内容を明らかにする。

(2) 乳がん患者の夫のストレスを緩和し患者へのサポート機能を促進させるために、情緒的支援・教育的支援を取り入れた乳がん患者とその夫のパートナーシップを高める看護プログラムを開発する。

(3) 開発した看護プログラムを適用した群と適用しなかった群との間で比較して、プログラムの有効性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 夫のストレスと提供しているサポート：

対象者は、乳がんと診断・告知され病院でがん治療を受けている患者の夫で、研究参加の承諾が得られた者。

データ収集方法は、半構成的質問紙を用いた面接法と記録調査法。質問項目は、乳がん患者が告知、手術、化学療法を受けた際に、夫が患者を支える際に感じた身体・心理・社会面におけるストレスおよび患者に提供している情緒的・实际的サポート内容とした。

面接は、対象者の日常生活に支障を来さない時間帯に、プライバシーが確保できる個室で行った。面接は対象者の承諾を得て録音し、承諾が得られない場合は面接終了後直ちに面接内容を記録した。

患者に関する記録調査は、当該患者の許可を得て、面接と同様の時期に患者の個人的要因（年齢、家族構成、職業など）と医療的な要因（治療内容、病状説明、病期など）に関する情報、および夫の個人的要因（年齢、職業など）について調査した。

データ分析は、面接内容から逐語録を作成し、身体的・心理的・社会的ストレスおよび情緒的・实际的サポートについて表現している部分を抽出し、カテゴリー化した。

倫理的配慮として、研究目的、意義、方法、予測される影響、研究から得られる利益、研究の参加は自由意思であり、参加を拒否、中断した場合でも不利益は被らないこと、話したくないことは無理に話さなくてもよいこと、等について口頭と書面を用いて詳しく説明した後、文書で研究参加の同意を得た。対象者が研究参加することについて、患者からも了承を得た。

(2) 看護プログラムの開発：

「乳がん患者を支える夫のサポート機能を促進させる看護プログラム」を開発するために、乳がん患者の夫が患者を支える際に体験している身体・心理・社会的ストレス、乳がん患者の夫が患者に提供している情緒的・实际的サポートの内容および文献を基に、看護プログラムの目的・目標と、内容、方法、開催回数等を検討した。

(3) 看護プログラムの評価：

研究デザインは、看護プログラムを適用する群を適用群、適用しない群を非適用群とする便宜的標本を用いた準実験デザイン。

対象者は、乳がんと診断・告知され、補助療法を受けている乳がん患者およびその夫で、研究参加の承諾が得られた者。適用群は通常のケアと看護プログラムを受け、非適用群は通常のケアのみを受けるものとした。がん専門病院の外来に参加を促すためのポスター掲示やチラシを配布するとともに、患者会を通じて研究参加を依頼した。

看護プログラムの適用：看護プログラムは週1回計3回の開催とした。看護プログラムの内容をいつでも気軽に振り返り学習することができるよう、自宅学習用として開発したDVDおよびモバイル機器教材を適用群に貸与した。

データ収集方法は、質問紙法と記録調査法。患者への質問紙調査は、①日本語版 POMS（患者および夫の精神状況）、②JMS-SSS 尺度（サポートの入手可能性）、③日本語版 HAD 尺度（抑鬱と不安）、④作成したサポート提供に関する質問紙の4種類を、夫には③を除く3種類の質問紙に無記名で回答を依頼した。質問紙の配付は、手渡し法もしくは郵送法を用い、郵送法で回収した。

患者の個人的要因（年齢、家族構成、職業など）と医療的な要因（治療内容、病状説明、病期など）に関する情報、および夫の個人的要因（年齢、職業など）については、対象者の許可を得て、記録調査もしくは質問紙調査を行った。

調査時期は、適用群は看護プログラム初日の開催前（ベースライン）と、看護プログラム終了後（3週間後）、看護プログラム終了後2週間後（5週間後）とした。非適用群の調査時期は、外来で研究参加の同意を得た後（ベースライン）、ベースライン測定後約3週間後、ベースライン測定後約5週間後とした。

データ分析は、評価項目毎に適用群および非適用群間でそれぞれ比較検討した。

倫理的配慮として、研究目的、意義、方法、予測される影響、研究から得られる利益、研究の参加は自由意思であり、参加を拒否、中断した場合でも不利益は被らないこと、等に

ついて口頭と書面を用いて詳しく説明した後、文書で研究参加の同意を得た。

4. 研究成果

(1) 夫のストレスと提供しているサポート：対象者は告知時6名、手術時4名、化学療法時8名の計18名。平均年齢はそれぞれ61.0歳、56.3歳、61.1歳だった。

告知時の夫のストレスは、「進行・転移・再発の不安」「告知による妻の動揺を感じる」「妻への対応に慎重になる」「乳がんだけでなく大丈夫だろう」「妻への対応方法が分からない」「心の余裕がない」だった。夫が提供していたサポートは、「心配しなくていいと声をかける」「気分転換についてアドバイスする」「妻の気持ちを察して話し方や話す内容を選択する」「乳がんについて知り合いから話を聞く」「家事を手伝う」「自分がすることは特にない」だった。

手術時の夫のストレスは「治療に対する心配・不安」「家事を行うことでの悩み」「面会での心身の苦痛」「仕事を休む」「くつろいだ時間がもてない」等だった。夫が提供していたサポートは、「面会に行く」「家事をする」「妻の身体を心配して指示する」「病気の話はしない」「気持ちのよいように声をかける」だった。

化学療法時の夫のストレスは、「脱毛した妻に対するショック」「妻の身体が心配」「妻への哀れみ」「がんの再発・転移・死の不安」「妻のペースにあわせる苦痛」「身体症状の自覚」「妻に心配される辛さ」「副作用出現への予期的不安」「他家族への配慮の難しさ」だった。夫が提供していたサポートは、「妻の負担にならない表現で話す」「妻の相談相手になる」「妻の闘病意欲を支える」「妻の気分転換をはかる」等だった。

以上のことから、夫は妻の病気の進行・再発・予後についての不安や自らの身体症状を抱えながら、気持ち・時間の余裕を持てずにいた。また妻への対応方法にも苦慮していた。夫の心身の健康を維持しながら患者をサポートする方法についての情報提供が必要と考えられた。

(2) 看護プログラムの開発：

看護プログラムの目的は「乳がん患者と夫の相互理解を深めると共に、心身のストレスを緩和し、夫のサポート機能を促進させて、夫婦がいたわり合いながら協働して質の高い生活を送ることができる」とした。また、具体的目標は①乳がんとその治療について理解を深め、夫婦相互のストレス体験とその発散方法を知る（a. 乳がんの治療経過を理解する、b. 乳がん治療の副作用とその対策について理解する、c. 夫婦の治療に伴う体験を共有する、d. 夫婦が互いに体験する身体・心理・社会的ストレスについて理解する、e. ス

トレス発散方法について理解し、実践する）、②夫婦で協働作業を行うことを通じて、互いのパートナーシップを高めあう（a. 要領よく家事を行う方法について知り、実践能力を高める、b. 患者の体調に合わせた食事について理解し、健康管理能力を高める）、③夫婦間コミュニケーションを深め、相互理解に基づいたサポート提供ができるようになる（a. 医療情報の活用方法について理解し、上手に活用できるようになる、b. コミュニケーションについて知り、医療者・夫婦間の意思疎通の方法について理解する、c. 夫婦で互いの気持ちに気づき合い、お互いについての理解を深める、d. 夫婦で互いの感情を感じ取る）とした。

働きかけの対象は、乳がん患者およびその夫とし、方法として認知的支援、教育的支援、情緒的支援を取り入れた。映像やパンフレットなどの視聴覚教材をもとにした情報提供およびグループ討議を中心に構成した。

認知的・教育的支援を行う際の教材として、先行研究の結果を基にDVDを作成した。DVDの内容は、講義編と日常生活のコミュニケーション編、料理編の3部構成とした。講義編「乳がんの基礎知識」の内容は、乳がんの特徴、手術療法、化学療法、化学療法の副作用、放射線療法、ホルモン療法とした。講義編「ワンポイントメモ」は、患者を支える家族のための6カ条、医療者とのコミュニケーション（医療を受ける心構え10カ条、セカンドオピニオンのこと、コミュニケーションに必要な5つのスキル）、がん情報さがしの10カ条、あなたのサポーターを探しましょう、COML（コムル）の活動についての内容を含めた。日常生活のコミュニケーション編は、夫婦間のコミュニケーションについて、看護師と乳がん患者とその夫が会話形式でやりとりを行っていくミニドラマ構成の内容とした。料理編は「肉じゃが」と「豚汁」の料理方法についての手順を示した。

また、乳がん患者および夫が家事や仕事の合間に自由に学習できる状況を確保するために、DVDの内容をモバイル機器でも視聴できるようにした。

開催方法として、看護プログラムは夫婦で共に参加する必要があるため、長期間の開催は参加を困難にする可能性があることから、開催回数は1週間毎に3回とし、具体的目標の①-③を各階で達成できるようにした。1回の所要時間は約2時間とした。

(3) 看護プログラムの評価：看護プログラムの参加者は2組と少なく、その理由は「3週続けての参加が難しい」「冬に外出して感染するのが怖い」「夫に負担をかけたくない」等であった。看護プログラムの開催期間および季節的要因が実用性を妨げていると判断

し、3 回のプログラムを 1 回に集約し、所要時間 4 時間の修正版看護プログラムを作成した。修正版看護プログラムの内容は、午前に具体的目標の①②を、午後に具体的目標の②③を達成できるようにした。修正版看護プログラムを実施した結果、3 組の参加を認めた。適用群の平均年齢は、患者 60.0 歳、夫 61.7 歳だった。修正版看護プログラム実施後はサポート得点が増加傾向にあったが、症例数が少なく、明らかな効果とは言い難く、今後の継続的な評価が必要と考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 6 件)

- ①鶴田理恵、告知を受けた乳がん患者のストレスと夫から提供されているサポート、第 22 回日本がん看護学会学術集会、2008 年 2 月 10 日、名古屋
- ②吉田智美、手術期の乳がん患者の夫が体験するストレスと患者に提供しているサポート、第 22 回日本がん看護学会学術集会、2008 年 2 月 10 日、名古屋
- ③林田裕美、術後補助化学療法中の乳がん患者の夫が体験するストレスと患者に提供しているサポート、第 27 回日本看護科学学会学術集会、2007 年 12 月 8 日、東京
- ④小関真紀、告知を受けた乳がん患者の夫が抱く思いと患者に提供しているサポート、第 27 回日本看護科学学会学術集会、2007 年 12 月 8 日、東京
- ⑤田中京子、再発乳がん患者の家族が患者に提供しているサポート、第 21 回日本がん看護学会学術集会、2007 年 2 月 10 日、東京
- ⑥小山富美子、再発乳がん患者が家族から提供されているサポートと家族に望むサポート、第 21 回日本がん看護学会学術集会、2007 年 2 月 10 日、東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 京子 (TANAKA KYOKO)
大阪府立大学・看護学部・教授
研究者番号：90207085

(2) 研究分担者

林田 裕美 (HAYASHIDA YUMI)
大阪府立大学・看護学部・准教授
研究者番号：10335929
橋弥 あかね (HASHIYA AKANE)
大阪府立大学・看護学部・助教
研究者番号：00457996
竹下 裕子 (TAKESHITA HIROKO)

大阪府立大学・看護学部・助教

研究者番号：10437668

梶村 郁子 (KAZIMURA AYAKO)

大阪府立大学・看護学部・助教

研究者番号：40521498

吉田 智美 (YOSHIDA SATOMI)

元大阪府立大学・看護学部・助教授

研究者番号：20382244

小関 真紀 (KOSEKI MAKI)

元大阪府立大学・看護学部・助手

研究者番号：50321120